



越知町山室

苦勞の結晶 —芸術としての棚田—

越知町内の『全国名瀑百選』の一つに指定されている「大樽の滝」〔落差：約34m〕の上流の山間に山室という小集落がある。すぐ南は佐川町と隣接し、世帯数は11戸、一番多い時で23戸ほどあったという。

ここに、それほど大規模ではないが結構趣きのある棚田がある。この集落で二番目という古老・福岡瑞山氏（78歳）の話によると、棚田の築かれたのは江戸時代の終わり頃で、一部に明治時代のものもあるという。土地を開墾する際に出てきた石を丹念に石垣に築き、足りない分は近くの山や谷から石を運んできて補った。当初は20人くらいで水田を作っていたらしいが、現在は7～8人程度に減ってしまった。瑞山翁はその中の長老である。幼い頃から出兵後の父の代りとして水田の畦の維持・管理などの百姓仕事をしていたという。畦に草が生えて稲を覆うと日陰になったり、害虫が付いたりして稲の生育が悪くなるので、草刈りが最も神経を使い、かつ一番の苦悩だったそうである。昔は牛や馬で田を耕したが、トラクターが登場してからは随分楽になったというが、それでも、何段にも分かれた田—棚田—では大型のトラクターで一気に耕すことはできず、しかも、狭い

田は小さな耕運機で手動で耕さないといけないので苦勞がかかるという。

一方、そんな苦勞とは裏腹に、心の安らぐこともある。それは、以前は6月の初め頃になると、水田の上やすぐ近くの谷を辺りが明るくなるほどのゲンジボタルが飛び交い、隣の佐川町での会合の帰りの夜道も、ヒノキの植林内にはヒメボタルが、開けた所ではゲンジボタルが数え切れないほどたくさんいて、ホタルの明かりでちょうちんがいらなかったほどであったという。残念ながら、その後の河川工事でホタルの数はめっきり少なくなってしまったそうである。

端から見ると幾重にも整然と築かれた荘厳な石垣に芸術性を感じ、四季折々に風情が醸し出されて何かほっとした気分させられるが、実際に耕作に携わっている農家の人々にとっては、目に見えない苦勞が多いことがわかる。とはいえ、先人たちの残してくれた貴重ともいえる財産—芸術—をいつまでも後世に残して欲しいものである。それには、後継者が育つか、オーナー制などで耕作者がいて田を荒らさない（休耕にしない）ことが必要であるのだが……。一度荒れてしまった水田は二度と元にはもどらないという。

ナウマン博士を陰で支えた人物・外山 矯

安 井 敏 夫

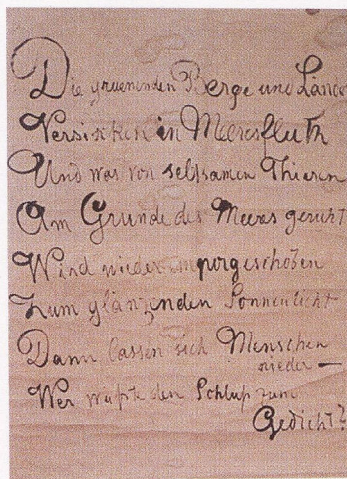
高知県佐川町には、いろんな地質時代の地層（特に中生代の地層）が複雑に分布し、かつては多くの化石を産したため、日本列島の形成過程を解明する上で大変重要な地域とされ、古くから多くの地質学者による調査が行われてきた。そのため、佐川は日本の“地質学発祥の地”あるいは“地質のメッカ”と呼ばれるようになったが、それには、一つには明治政府によって日本に招かれたドイツ人地質学者エドモンド・ナウマンの功績によるところが大きいと言える。

ナウマン博士は、日本全国の地質を調査して歩き、わが国初の日本列島の地質図を作成している。四国の調査に際し、1883年（明治16）と帰国の年の1885年（明治18）4月の2回佐川を訪れ、2回目の訪問の年のベルリンで出版された論文（ドイツ語）『日本群島の構造と生成』の中で、「Torinosu Kalk（鳥ノ巣石灰岩）」を定義（命名）し、世界に紹介した。それ以来、佐川の名は全国に知れ渡り、多くの地質学者や研究者が次々と訪れ、また、地質学を志す者は一度は必ず佐川を訪れるような存在となった。かつて、日本列島の骨組みの一部を造ったとされた「佐川造山運動（佐川造山輪廻）」を提唱した小林貞一博士や、当時日本の地質学の指導的地位にあった小藤文次郎博士、化石植物の権威・横山又二郎博士などの著名な地質学者たちも足跡を残している。特に、小藤博士の地質調査の際には若き地元佐川町出身の世界的な植物学者・牧野富太郎博士も一緒に同行しており、その際採集した鳥ノ巣石灰岩中のウニ（キダリス）の棘を“松毬石”と称して東京大学の地質学教室に寄贈したという話は既に前巻で紹介した。

さて、ナウマン博士が佐川地域の本格的な地質調査を行うことができた陰には、当時佐川で旅館業を営み、熱心な化石の蒐集家でもあった外山 矯^{※1}という人物がいたことを抜きにしては語れない。彼は、自分の経営する旅館を宿としていたナウマン博士に同行して化石の産地を案内してまわり、調査に協力している。この時〔明治16年当時〕、矯35歳、ナウマン博士29歳であった。また、彼は、わが国初のノーベル賞受賞者である

湯川秀樹の実父・小川琢治^{おがわたくじ}の地質調査の際にも案内役を努めており、その隠れた功績は大きい。ただ、外山 矯が化石に精通していた背景には、卒論のために佐川盆地（越知町も含め）の調査の際滞在した東京大学の本田（後に奈佐に改姓）忠行から化石採集の実地指導を受けたことを忘れてはならないし、また、ナウマン博士自身の地質調査も奈佐氏の研究成果・業績に負うところが大きかったことも事実である。

ナウマン博士はよほど外山 矯が気に入ったのか、博士が雨の日に旅館で外山 矯に土佐和紙に毛筆で書いて与えたというドイツ語の詩（日付、場所、署名はない）〔写真〕が現存していることはよく知られている。ちなみに、高知県には、もう一つのナウマン博士のドイツ語詩（軸装）がある。やはり、毛筆で和紙に書かれており、こちらの方にはドイツ語ではっきりと、「領石にて 1885年5月4日 エドモンド・ナウマン」と記されている。このことから、ナウマン博士が2回目に佐川を訪



れた翌月に南国市の領石に足を運んだことがわかる。わが国の地質学の歴史上貴重なこれら2つの資料は、現在佐川地質館に展示保管されている。

このうち、ナウマン博士が佐川で外山 矯に書き与えたドイツ語墨詩を判読すると次のようになる。

Die gruenenden Berge und Länder
Versinken in Meeresfluth
Und was von seltsamen Thieren
Am Grunde des Meeres geruht
Wird wieder emporgeschoben
Zum glänzenden Sonnenlicht
Dann lassen sich Menschen nieder—
Wer wüßte den Schluß zum Gedicht?

〔沢村武雄（高知大学名誉教授・地質学者）^{※2}判読〕



浦戸湾～高知市街の鏡川大橋方面を一望できる高見山(皿ヶ峰)の中島町天主教会共同墓地

手前から二つ目が外山 矯の墓

この詩の日本語訳については、次の二通りがある。

- I. 緑の山野は 湖に没して
奇なる生物浮泳する
海底となりしが
後 再び波上に隆起して
太陽輝く陸地とふ
然る後 人生じて此處に住めり
さはれ これより未来は
神のみ 吾知らん

〔江原真伍(地質学者) 訳〕

- II. 緑なす山々 国原は
大海の中に安らい
奇しき動物の
海底に沈めるもの
再び輝しい日の光のもとに
持ち出され
人類ここに定住する
誰か知るこの詩の結論を

〔桜井国隆(高知大学名誉教授・ドイツ文学者) 訳〕

このうち、一般には、後者の方がより原文の意味に近いとされている。

外山 矯は、晩年は伊野町(現いの町)で暮しているが、ナウマン博士が故国ドイツで1927年(昭和2)2月1日に亡くなったその後を追うように翌2月2日に79歳で没している。墓は、高知市の筆山公園南方の皿ヶ峰(162.8m)東斜面(宝蔵寺西方)の、浦戸湾を一望できる絶景の中島町天主教会共同墓地内にひっそりと建っている[写真]。御影石製の墓石の正面にはキリスト教[カトリック系]の十字架と『アンドリヤ^{*3}外山矯墓』、左側面

一後面一右側面の三面にわたって、高知県出身の郷土史家で考古学者でもあった寺石正路^{せんぶん}の撰文による、外山 矯の生い立ちと功績を称える13行にも及ぶ墓誌銘が刻まれている。

翁諱矯幼字正衛號紫園父恩田淳三郎母井原氏嘉永元年生於高岡郡佐川町早歳有故継外山氏夙就鄉儒山本澹齋藩儒奥宮慥齋岡本水一方学知書漢籍有所造諸焉君少壯而身体肥満醫師勸□粗練軀自是始□蒐集博物金石為樂會獨人諾曼來佐川探化石君訪之乃知化石之為世界地質学之基礎一意力其收拾爾來拮据者多年其所獲之化石無慮至数百點皆為稀世標品於是土佐佐川化石之名始聞海內外攻究地質之士莫非一來百翁受其指導也晩年移住伊野町傍集古郵券古錢貨等為樂或賦詩歌俳諧送餘生昭和二年二月二日病歿享年八十有二翌日修哀悼式於天主教会葬潮江山嗣子早歿孫正一郎承後□遺命舉化石圖書等遺品之大部者寄贈諸高知圖書館□

昭和二年三月 寺石正路 撰

碑文からは、「外山 矯は、少壯の頃身体が肥満で、医師から粗食と鍛練(運動)を勧められたので、趣味で化石・鉱石などの博物の蒐集を始め、ドイツ人のナウマン博士が佐川に化石を採集しに来た際は化石の産地を案内し、世界の地質学発展の基礎に一役かった。長年の蒐集の結果化石資料は数百点^{*4}にものぼり、佐川の化石のことが海外にまで知れ渡り、国内外からの地質研究家は必ず外山 矯を訪ねて氏の指導を受けた。

……死後化石や蔵書(古文書)等の遺品の大部分は高知県立図書館に寄贈された」ことがわかる。ただし、残念ながら寄贈された化石を含む遺品は第二次世界大戦の戦災で焼失したということである。

外山 矯のコレクションがどんなものであったのか、また、矯の営んでいた旅館の所在や矯自身どういう人物で、ナウマン博士との行動過程はどうであったのかなどもっと具体的に知りたいが目下それらに関する資料はない。先人の偉業が時代とともに風化しないようにしっかりと記録に留め後世に語り続けていって欲しいものである。

※1 外山 矯は恩田家から外山家へ養子入りしたが、生家は現在のJR佐川駅前の旅館「米日屋」当り(西向かい側には古くから地質家がよく利用する明清館がある)にあったと思われる。

故外山玉汝氏(越知町)はその孫で、ドイツ語の墨詩の寄託者・故岡田敏彦氏(越知町)は曾孫に当る。

※2 沢村武雄(1960): Naumannの詩。地学雑誌、Vol.68, no.711, p.26-28.

本文中では、一番最後の行がwüSte(接続法・現在形)とされているが、ナウマンの原詩ではwuSte(直接法・過去形)となっている。

※3 正しくは「アンドレア」で、洗礼名(クリスチャンネーム)のこと。ナウマン博士に感化されてクリスチャンになったと思われる。

※4 外山 矯の採集した化石の中に、種名に「外山」の付いた新種のものがある。

例: トリゴニア(三角貝) *Linotrigonia toyamai* (Yehara)

〈協力〉

藤本尊史氏(元佐川町教育委員会): 外山 矯の墓の所在について
竹村 脩氏(佐川史談会・陶芸家): 外山 矯の実父・恩田淳二郎の墓と明治初年の佐川の古地図について

(やすい としお/横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員)

『空気の歌』を使って 総合学習

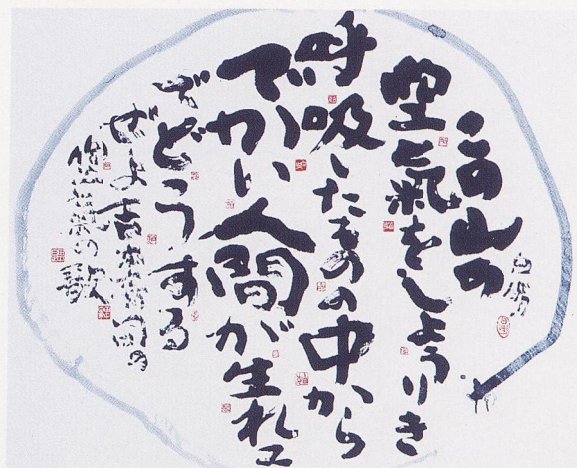
堀 見 矩 浩

「学ぶ子が育つ授業をめざす国語研究サークル『麦の会』(伊藤経子代表)が、平成17年1月14日(金)、高知市立鴨田小学校の5年生を対象に吉本青司詩、田中白歩書の「空気の歌」[写真]を教材として研究授業を行った。

この詩は、詩人・吉本青司先生(越知町出身)の次の詩を、書家・田中白歩先生(高知市在住。戦前、野老山小・越知小に勤務)が書かれたものである。

この山の
空気をしょうりき※1
呼吸したもののの中から
でかい人間が生れエ
でどうするぜよ※2

この書は、2000(平成12)年3月、越知町立横倉山自然の森博物館で開催された企画展:「白歩の書展—自然憧憬—」に出品された18点中の一点である。書展を観た『麦の会』の伊藤代表が大きな感動を受け、その中の「空気の歌」を題材にして音読の指導をすれば効果的ではないかと考えて研究授業が計画された。この作品は、「白歩の書展」に展示後、田中先生より越知町に寄贈され、博物館



の図書室に掲示されていて、今回はそれを借りて来て実施することになった。

実は、当時私は、横倉山自然の森博物館の館長をしていたが、この詩の中に登場する「この山」とは一体どこの山であろうかという疑問があった。青司先生は現在は越知町になっている旧横畠村の出身であるので、どうも横倉山ではないだろうかという思いはあった。しかし、証拠はなかった。ところが、ある日、吉本未亡人が会場に来られたのでお尋ねすると、「そうです。たしかに横倉山をイメージしたものです」とおっしゃられ、証言を得ることができた。それならば、横倉山を冠詞とする博物館にふさわしい詩であり、詩人と書家が一体となって創作した傑作であるのでぜひ博物館に残しておいていただきたいの思いを強くし、先生にお願いしてご寄贈いただいたという経緯がある。偶然にも私の座右銘「地霊人傑」—すぐ

れた土地柄がすぐれた人物を生むーと共通するものがあり、その思いは尚更であった。

さて、今回の授業研究会の最大のねらいは、「空氣の歌」という大きな扁額の書作品〔たて121×よこ143[㌢]〕を子どもの身近に置き、それを直接見ながら音読の学習をさせるというところにあった。生の作品を子どもに見せて詩の鑑賞をさせよう、教材として利用し、どれだけ効果があるかを見てみようというのである。生の教材価値を探ろうというものであった。自分の感性を精一杯はたらかせて読むようにさせ、友だちと一緒に、また、一人で「空氣の歌」を自分なりに感じとり、感じとったまを音読に表現できるようにしたいというのである。

授業後、参観者の間で話題となったのは、短い詩であるけれども、文中のどこで区切るか、それに生の作品がどう影響を与えるかということであった。そして、今回の授業参観で分かったことは、詩を読む時の区切り方に、書に書かれた作品が大きく影響するということである。

実は、青司先生のこの詩は、詩集『日々の歌』（1958年3月、棟風社刊）に収録されており、その

中では次のような区切り方がされている。

この山の空気を
しょうりき呼吸したものの中から
でかい人間が生れエで
どうするぜよ

読点のない原詩をどう区切って読むかは、授業を受けた子どもを含めて、全く読む者の自由であり、それを画一的にすることは詩の鑑賞として邪道であることはいままでもない。だからこの詩をこのように区切って読めというのではないが、これも区切り方の一例であり、この度の授業はそのような読みの区切り方について一つの示唆を与えるものであったといえることができる。

しかも、これは博物館の収蔵品である書作品が学校の教材として授業に使われた典型的な事例であり、今後、このように学校の授業に使い得る収蔵品を増やす工夫と努力をすべきであることをこの事例は物語っている。

※1 土佐弁の表現で、「まともに」の意

※2 同上で、「どうするのか、どうなるか」の意

（ほりみ のりひろ／元横倉山自然の森博物館館長）

博物館ニュース

写真展：「土佐の花」

〔2005年2月5日(土)～3月13日(日)〕

河津 哲氏（高知工科大学教授）が、退官を前に、大学に赴任して以来、その美しさと魅力に引かれ撮り続けてきた土佐の植物のうち、横倉山とその周辺の植物写真、約60点を展示。

横倉山を代表するコオロギラン、トサジョウロウホトトギス、ヤマトグサを始め、アケボノツツジ〔赤・白〕、ヤマシャクヤク〔赤花・白花〕、キレンゲショウマなどが、氏の撮影に当たってのエピソードと解説付きのキャプションと共に紹介され、大変興味深く鑑賞できた。特に、氏の植物に対する接し方、保護意識なども伝わり、有意義な写真展であった。

観覧者の主な感想には、「ゆっくり見せて頂きとても幸せな気分になりました。一日中見てもあきが来ません」、「自然のすばらしさに出会いました。大変すばらしく美しい花に感動致しました」、「子供の頃横倉山で見た懐かしい花がありました。年々消えていくのが寂しく思います」



などがあつた。また、『大阪に帰られても、また来高して下さいネ』、『土佐を去られるのが残念です』といった自然を愛する氏への愛着の言葉も寄せられていた。

尚、写真展終了後、本県を去るに当り、氏から当博物館に、今回展示していた植物写真28点が寄贈された。

写真展：「仁淀川の風物」

〔2005年3月19日(土)～4月10日(日)〕

昨年夏の企画展：「仁淀川の自然」の一環として行った『仁淀川フォトコンテスト』の入選作品23点と協力者の作品12点の計35点を展示。

清流・仁淀川とその流域に見られる四季折々のさまざまな自然とそれらによって育まれてきたいろんな文化をテーマにした写真を紹介することにより、流域の人々はもちろん広く県内外にもそれらの“美”を再発見・認識してもらい、併せて大切な記録として永久に保存し、みんなの力で保護し後世に受け継いでいくことへの一つのきっかけになればとの願いで開催する。「金



金賞：「初夏の頃」(川添秀子・高知市)

賞」には、最高齢の80歳の女性の撮った、里山の田園での手作業による農作業風景を題材にした作品：「初夏の頃」が選ばれた。なお、銀賞：「解禁の朝」(松本勝作・高知市)、銅賞：「虫送りの日」(戸梶忠俊・日高村)。協力者による作品には、野鳥・沈下橋・棚田などがあった。

開会初日に表彰式が行われ、『応募点数はそれほど多くはないが、一枚一枚の写真の裏に隠された苦労や努力、そして、意気込みが感じられ、技術的にも優れた作品がある』との総評(岩崎 勇 審査委員長(写真家、県展無鑑査・審査員))であった。

企画展：『にしみねくみ 染色展』

〔2005年4月29日(金・祝)～5月29日(日)〕

染色作家・西峯久美氏(高知県土佐山田町)による、身近な自然の草木を使った染色による、ふきん・ふろしき・ストール・のれん・タペストリーなどの作品約70点を展示。西峯氏がこれまでに手掛けてきたいろんな手法による作品のほか、氏が最近独自に考案した、竹を使った“竹締めしぼり”による作品など、自然の草木によるものとは思え



ないような、思いがけない魅力的な色が演出され、見るものを魅了するような上品で落ち着いた美しい色合いを楽しむことができた。主な染料としては、桜・梅・クルミ・イチイ・新高梨の幹、タマネギの皮などで、媒染として、アルミ媒染・鉄媒染を使用。

「草木染はやさしくおだやか、上品な色合いであたたかみを感じます」、「竹締めしぼりステキでした。やさしい西峯さんのお心が見えた様でした」、「きれいな作品を見て心が変わりました」、「草木染は見ていて心がやすまりました」、貴重な日本の文化ですね、「出会えてとてもよかったです。勇気を頂いて帰ります。ありがとうございます」などの感想が寄せられた。

友の会だより

《定着した博物館での結婚式》

横倉山自然の森博物館では、“人々に愛され、親しまれる博物館”を目標にこれまで活動・運営を行ってきたが、地域の博物館として“開かれた博物館”であることを願っている。その一つとして、越知町市街地と清流・仁淀川が眼下に広がる眺望の良い3階展望ロビーでの結婚式〔挙式〕がこれまで5組ほど行われた。いずれも、新郎もしくは、新婦が地元越知町出身のカップルで、「思い出に是非博物館で結婚式を挙げたい」という希望に応えての開催である。

2005年になって最初の挙式が春まだ浅い2月20日(日)に行われた。事前に博物館内や進入路の黄葉したメタセコイアの並木をバックに前撮りを行い、挙式に望んだ。挙式当日は、前日までの雨も上がり、青空がのぞくものの外は低気圧の通過で冬型の気圧配置となり風がやや強く肌寒い天候であった。会場の正面壁には十字架、床には赤いパーজনロードが敷かれ、エレクトーンの演奏に従い新郎・新婦が入場し、牧師〔越知キリスト教会〕の司式の元、讃美歌の合唱、『誓約』・『指輪の交換』・『パールオープン』と誓約式を行い、神・関係者の前で「愛」を誓った。『自



分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい』、『どんな時にも感謝する気持ち、“有難う”のこたばをもちなさい』との神の教えを胸に、親族・参列者に祝福されながら、また若い新しいカップルがこの博物館から旅立って行った。

【アケボノツツジの群生地「エボシ岩」へのルート整備】

2005年3月13日(日)

昨年横倉山系で新たに確認されたアケボノツツジの群生地の岩場：「エボシ岩」〔950m〕への登山道の整備を友の会の会員で行った。当日は、あいにく小雪の舞う天候で、雪の積った山道を登ることになった。途中には安徳天皇の従臣を祭っているとされる小祠や壊れた小屋があり、ミツマタもあることから、昔ここで紙幣の原料として栽培していたことがわかる。周りはずっと杉の植林であるが、あちこちにかつての人々の生活の跡が見られ、歴史が感じられる。当時を想像しながら歩く結構楽しい。出発点から1時間ほどで、6本の山道が交わる「野老山峠」に辿り着く。そのうちの1本は、幕末に土佐藩の家老・吉田東洋を暗殺した那須信吾が脱藩して隣の仁淀村森へ抜ける「森住還」である。峠といっても今は周りはすべて植林でうっそうとしている。ここからルートを北に変え尾根沿いに山道を整備しながら目的地に向かう。道中は大半が植林地であるが、所々にある雑木林とヤブツバキの花が疲れを癒してくれる。出発から約2時間15分で目的地の「エボシ岩」に着いた。ここもかつては横倉山修験道の行場の一つだったのであろうか、ここにも安徳天皇の従臣を祭った小祠があり、岩場の頂上に至る小規模な鉄の鎖が設置されている。南方には安徳天皇陵墓参考地が、北方には天気がいい日には遥か彼方に同じ修験道の霊場で西日本最高峰・石鎚山〔1982m〕を望むことができる。



この日は積雪もあり風も冷たく、30分ほどで昼食を終え、早々に帰路に就いた。4月23日(土)には、博物館友の会「フォレストクラブ」の本年度最初の事業である「アケボノツツジ観察会」[写真]が行われ、同時に案内標識も設置した。

「草木染め教室」

2005年4月30日(土)〔講師：西峯 久美氏、参加者：16名(博物館3F展望ロビー)〕

野いちごの葉を染料として、アルミ媒染(ミョウバン)・鉄媒染(木酢酸鉄)を使用して染色する。

ハンカチ大の木綿の布に各自好きな図柄を筆をつかって豆乳で描き、それを染料に浸す。媒染剤がミョウバンでは黄色、木酢酸鉄では灰～灰紫色に染色される。使用する媒染の違いによって、全く意外な異なった色に染まる。後はよく水洗いして自然乾燥する。

全行程は約3時間。一部は企画展に作品として展示、他は各自ハンカチやスカーフとして思い出に持ち帰った。



《博物館3階展望ロビーで呈茶》

ゴールデンウィーク期間中の5月4日(水・祝)、新緑に包まれ薫風のそよぐ博物館3階展望ロビーで、越知町茶道サークル・博物館友の会メンバーの協力による野立形式の呈茶が行われた。野立傘を立て、縁台に赤い毛氈を敷き、和服姿の会員たちが来館者に心尽くしの抹茶と和菓子でもてなした。

4年ほど前に行ったのが好評だったのと、来館者のアンケートの中で最も多い要望の一つ「眺望がいいのでカフェテラスか喫茶コーナーのようなものがあるといい……」にこたえての開催であった。お客様に対する気配りの心をいつまでも大切にしていきたい。



【ヒメボタル観察会】

2005年6月18日(土)〔講師：高橋厚彦氏(高知市子ども科学図書館指導員)、参加者：大人21名〕

梅雨時期恒例のヒメボタルの観察会を横倉山杉原神社境内で行った。ヒメボタルは、ゲンジボタル・ヘイケボタルとともに日本を代表するホタルで、体長：オス約9mm、メス約7.5mmの小型のホタルで、オスの方が大きく、メスは下肢が退化していて飛べないという。オス・メス共に発光するが、オスはチカッ、チカッと小さなほのかなフラッシュのような光を放ちながら飛ぶ。幼虫のエサは、ゲンジボタルやヘイケボタルとは異なり、キセルガイやマイマイなどの陸上の巻貝(陸産貝)を主食とする。横倉山には石灰岩が分布し、陸産貝の種類も結構多いので、ヒメボタルの生息には適しているのかもしれない。

この日は、出現のピークではなかったが、平家伝説の伝わる横倉山中での幻想的な光の演出を満喫した。

【中津明神植物観察会】

2005年6月19日(日)〔講師：恒石直和氏(高知市子ども科学図書館館長)、参加者：大人15名〕

梅雨時期の薄曇りの下、吾川村名野川の中津溪谷沿いの植物観察を行う。中津溪谷は牧野富太郎博士が横倉山に次いで植物採集・研究に訪れた所といわれ、博士が日本人として最初に植物に学名を付けたヤマトグサ[やまどぐさ科]の自生地として有名である。溪谷が深いせいか、自然林が多く、所々に古い自然の森が残っている。手前の「二所神社」境内には、幹周りが3m近いトチノキ[とちのき科]の大木や恐竜時代からの「生きた化石」で日本にしかないカツラ[かつら科]の他、葉が異常に大きなイノデ、リョウメンシダなどのシダ類も見られた。

一方、これよりも上流の中津山(明神山：1540.6m)山麓の「おおやまみじんじや大山祇神社」境内には、推定樹齢800年と言われるトチノキの大木を始め、モミ・トガ・アカガシ・サワグルミなどの大木の他、イタヤカエデ・イロハカエデなどが自生する原生林に近い自然の森が残されていた。牧野博士がヤマトグサを最初に発見・命名したのがここであったと言われている。神社境内の「鎮守の森」は木を伐採しないため古い自然に近い森・植生が保たれており、植物の研究にとっては貴重な存在であることを改めて認識した。

この他、中津山東面の「上名野川自然休養林」の一角の石灰岩地では、クサアジサイの群生の中に、ヤマアジサイ・ワタナベソウ・ギンバイソウ(横倉山にも小群生がある)の自生する場所があり、石灰岩植物の多様性・魅力を感じることができた。



横倉山ミニ歳時記

フジキ 学名: *Cladrastis platycarpa* Makino

和名「藤木」は、小葉がフジ(藤)のそれに似ていることによる。山中に生える稀な落葉高木で、牧野富太郎博士の発見・命名による『横倉山タイプ植物』の一つであるが、これまで専門家の間でもどこにあるのかわからなかった。今回横倉山第二駐車場で花を咲かせているのが、長年定期的にこの山を訪れている植物研究家によって確認された。樹高: 約15^m、幹周り: 約65^{cm}、枝先から15~20^{cm}の複総状花序をつけ、花はやや大形の白い蝶形花で、長さ約15^{mm}。残念ながら、ここは根元から一度倒れた後再び成長した形跡がある。ただ、幸いなことに、この周辺にさらに大きなフジキが2本あることが確認された。



【博物館友の会「フォレストクラブ」の平成17年度の活動】

- 4月23日(土) エボシ岩のアケボノツツジ観察会
- 4月30日(土) 草木染教室
- 5月4日(水・祝) 呈茶—博物館3階展望ロビー—
- 5月21日(土) 友の会運営委員会
- 5月22日(日) 横倉山野鳥観察会〔雨天のため中止〕
- 5月29日(日) 友の会総会
- 6月18日(土) ヒメボタル観察会—杉原神社—
- 6月19日(日) 中津明神植物観察
- 7月23日(土) ムササビ・コテングコウモリ観察会—杉原神社(山小屋キャンプ)—
- 9月 明るい里山づくり—炭窯づくり—〔高知県森と緑の会 公募事業〕
- 10月 熊野古道(世界遺産)—修験道—研修会〔1泊2日〕
- 11月 炭窯づくりとシイタケづくり
- 12月18日(日) クリスマス リース教室
- 2006年1月1日(日) 初日の出を横倉山で

【平成17年度博物館行事】

- 3月19日(土)~4月10日(日) 写真展:「仁淀川の風物」
- 4月29日(金・祝)~5月29日(日) 企画展:「にしみねくみ 染色展」
- 7月24日(土)~9月4日(日) 企画展:「土佐のカエル」〔協力・NPO法人 四国自然史科学研究センター〕
- 7月31日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕
- 8月6日(土) 夏休み博物館教室〔植物〕
- 8月7日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕
- 8月14日(日) 夏休み親子工作教室〔万華鏡作り〕
- 10月1日(土)~11月6日(日) 企画展:「ワイルドライフ アート展—Part II—」
- 2006年1月 写真展:「懐かしい昭和の越知町」

スタッフの声、声、声

(片岡) 今年はペルセウス座流星群が最良の条件で見られます。極大は8月12日の晩、月齢7の月が西の空に沈むころ北東の空から昇ってくるペルセウス座から四方八方へ飛び出すように流星が飛びます。1時間に30個以上の流星が見られるでしょう。ちょうど金曜日、天気良かったらちょっと夜更かしして流星ショーを楽しみませんか。

(西川) 今年4月から博物館の副館長になりました西川光一です。博物館友の会の活動に参加し、只今観察の修行中です。鳥の声や草花に気が付くようになってきました。

(安井) 去る6月12日、横倉山第3駐車場すぐ上の原生林内のシイの大木に止まって鳴いている“幻の鳥”ヤイロチョウの姿を幸運にも観ることができた。腹の赤色の羽毛、背中から腰にかけての鮮やかなコバルトブルー、飛ぶ時の両翼の白色の丸い斑紋がはっきりと確認できた。毎年5月中頃に横倉山に飛来して美しいさえずりを聞かしてくれるが、野鳥研究家の話によると、この頃は通常はもうほとんど鳴いてない時期であり、何らかの原因—うまく相棒が見つからなかったとか—が考えられるそうである。そう言えば30分以上にも渡りしきりに鳴いていた。早く良い相手を見つけて無事カップルになって欲しい……と願いつつその場を後にした(6月28日もまだ鳴いていたという)。

(小松) 今年は越知中学校の総合学習の哺乳動物調査班のみんなと合同で越知町に生息する哺乳動物の調査を行います。NPO四国自然史科学研究センターの皆さんの協力で、動物の生態・人とかかわりなどについて調べます。「町内のどんなところに、どんな動物がいるの? どうしてここに?」。合同調査班全員が熱心に取組みます。皆さんご協力お願いします。

(黒原) 私が博物館に入ったばかりの時は、2階の事務室の机から少し下に見えていたメタセコイアの木も、3年半近くの間に5^m(…くらい?、以上?)も伸びています。ふと気が付くと、どんどん伸びているメタセコイアを見て、時の流れを感じています。今はまだ事務室から、そのてっぺんが見えていますが、いずれ見えなくなるのも時間の問題かな。

(伊藤) 夏にカエルの企画展があると聞いてから、犬と散歩中に田んぼの中などをよく覗き込んでいます。散歩コースの途中にある水溜まりのオタマジャクシは前足と後足がやっと生えてきました。水溜まりが干上がらないかと心配しながら見守っています。こうやってよく見ると、家の近くに何種類ものカエルたちがいたことを知り驚きました。ちなみに、私のお気に入りには「トノサマガエル」〔高知県では絶滅危惧種〕です。

(福岡) 博物館で働くこと3年…。6月をもって退職することになりました。この場をお借りしまして、職員、友の会、関係者の方々にご挨拶をさせていただきたいと思います。「皆様、本当にお世話になりました。」6月が近づくにつれ退職が現実になり、博物館職員・関係者の方々が本当にステキな方ばかりだということを改めて感じました。同じ月日でも、出会う人々で“濃さ”が違うことを知り、“出会い”の大切さを感じました。色々な会社で勤めましたが、辞めることがこんなにも淋しい職場は初めてですね。この気持ちは哀しいことではなく、すごくステキなことだと解釈しています。博物館に勤め、“形のない宝物”ができました。本当にありがとうございます。退職後も博物館にはお邪魔するので、その時にはよろしく願います。

高知県越知町立



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620

- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人……………500円 (※各20名以上
の団体は100円引き。)
高校・大学生…………400円
小・中学生…………200円
- 越知への交通
高知—JR特急 約30分—佐川—バス 約15分—越知
JR普通 約50分

